



### 対話から浮かび上がる必要な支援

大津 里穂

「フィリピンは経済格差社会の縮図。そのギャップを肌で感じてほしい。」  
路上で生活する子どもたちの保護や自立を促す活動をされている NPO アイキャンの野村さんの言葉を胸に、研修に臨んだ。

首都マニラには、貧富の差が文字通り隣り合わせで存在していた。高層ビルが立ち並ぶ大通りから一本入ると街並みが一変し、トタン屋根の窓のない家々、ガタガタの道、水溜りに浮かぶ大量のゴミ、路上で生活する人々。初めて目の当たりにする貧困の光景に目を奪われた。

路上や養護施設にいる子どもたちと、歌ったり折り紙をしたりして一日過ごした。明日住む家を退去するという男の子の話に言葉を失う。彼が警察官になりたいという夢があると聞いて、少しだけほっとした。フィリピンの人は「バハラナ（何とかなるさ）」という言葉をよく使うそうで、苦境にあっても希望を持つ精神は子どもたちに受け継がれているのだろうか。

バタンガスでは、農業と防災を伝える協力隊の現場を視察した。JICA も NPO も歴史的・文化的背景を配慮して、対話を重ねながら自立支援の仕組みを築いていた。

JICA 事務所で、特に貧困率が高いミンダナオ島の話聞いた。一因に数十年にわたる民族紛争があり、JICA が和平交渉の場所を提供した話が興味深かった。私は近々、ルワンダの NGO で紛争後の社会復帰支援と教育支援を学ぶ予定だ。JICA の支援現場も訪問し、国際協力について更に学びたい。